

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1
管理機関名 兵庫県教育委員会
代表者名 教育長 西上 三鶴

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、
下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日（契約締結日）～ 令和4年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 兵庫県立佐用高等学校
学校長名 西坂 美樹
類型 プロフェッショナル型

3 研究開発名

「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル
人材の育成 ～佐用風土 (Sayo Food) を活用したモデルプランの構築～

4 研究開発概要

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安心・安全な町
づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んで
きたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的では
なく、「食」を通じて「佐用風土 (Sayo Food)」と地域人材を活用し、健康の見直しや
災害の時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サー
ビス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を
図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びを深め地
域課題の解決につなげる。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- | | | | |
|-------------|--------|---|---------|
| ・学校設定教科・科目 | 開設している | ・ | 開設していない |
| ・教育課程の特例の活用 | 活用している | ・ | 活用していない |

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
西田 利也	兵庫県教育委員会 高校教育課長	学校教育に専門的知識を有する者
江見 秀樹	佐用町役場 企画防災課長	関係行政機関の職員
浅野 博之	佐用町教育委員会 教育長	学校教育に専門的知識を有する者
岸田 恵津	兵庫教育大学 教授	専門的知識（生活科学等）
田和 久典	IDEC 株式会社 グリーンソリューション事業部長	学校教育外部有識者（産業）

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長 清水 道子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 西川 典男
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 井上 洋文
一般社団法人ドローン減災士協会	代表理事 久保 正彦

8 カリキュラム開発専門家、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
地域協働学習支援員	服部 憲靖	佐用町企画防災課	非常勤

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム委員会		○					○				○	
運営指導委員会					○				○		○	

(2) 実績の説明

① コンソーシアム及び運営指導委員会を通じた事業管理と指導・助言

コンソーシアム及び運営指導委員会に高校教育課の担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。

② 事業終了後の自走を見据えた取組について

事業終了後、本事業の取組を持続可能なものにするために一定の事業経費を計上し、支援する予定。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（契約日 ～ 令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①佐用の特産品を活用（商品開発）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③佐用の水害から学ぶ（安全・安心な町づくり）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

佐用町は、老年人口率40%（全国平均の1.5倍）という現状に加え、平成21年台風9号の豪雨被災の教訓を生かし、地域の活性化と安全・安心で充実した暮らしができる町に進化させることが課題である。本校もこの課題を認識し、町と協働で地域の活性化・貢献活動に取り組んできた。

この事業では地域特産品や伝統料理、健康食といった「食」を中心に町と連携している「佐用風土（Sayo Food）」に関する取組を発展充実させ、「ローコスト・ハイクオリティ社会」の実現に貢献するとともに、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランを構築する。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置づけ

【佐用の特産品を活用（商品開発）】

a 総合的な探究の時間（1学年）

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品に関する知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動（佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習・発表の探究活動）（4月～7月）

生徒の感想には、「特産品などを知ることができ地域に愛着を感じた。」など、地域への興味関心が深まっていることが確認できた。

b 生活産業基礎（1学年）

- ・商品開発におけるプロセスについての知識習得（5月～6月）

特産品による商品開発において基礎知識を習得した。

c フードデザイン（1学年）

- ・「食」に関する基礎知識と基本的技術の習得、地元食材の「佐用もち大豆」を用いた料理やメニューの開発（5月～3月）
- ・日本調理製菓専門学校に訪問し、大量調理技術の講義と実技・カフェ経営の講義と実技により専門的な知識と技術を習得した。（10月、11月）
- ・佐用小学校1年生対象に「食育」をテーマにリモートで講義とゲームでの交流会を実施

し、プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を高めた。

d ヒューマンサービス（2学年）

- ・佐用町社会福祉協議会との協働で「給食ボランティアサービス」の参画を通じて、独居高齢者のサポートを行うための地産地消メニュー開発を行った。単に調理を行うだけでなく、お弁当のパッケージにメッセージを添付するなど、高齢者をサポートする工夫を凝らした。また、大量調理の技術が向上するとともに、ふるさとに対する誇りや愛着も深まっている。さらに、はがきによるアンケート調査を実施し、高齢者の意見に寄り添ったメニュー改善も行った。（5～12月）

e 課題研究「食物」（2学年）

- ・佐用町の特産物である夢茜トマト、佐用もち大豆を用いての商品開発やメニュー開発（5月～12月）

月に一度のペースで、佐用町企画防災課、保健福祉課、農林振興課、栄養士、農産物生産企業、商品製作企業の担当者と、校内で生徒を交えて商品開発会議を行った。会議の進行を外部の方に委託することで、生徒の主體的な学びにつながった。本年度は、夢茜トマトを用いて「トマトソース」と「佐用もち大豆入りトマトゼリー」を開発。

- ・「姫音祭」にてイーグレ姫路での広報活動及び展示即売会（11月）

本年度の商品開発に関する広報活動及び商品の即売会も行い、生徒はプレゼンテーション能力だけではなくコミュニケーション能力などの向上も見られた。生徒の感想には「商品を通じて佐用町をPRできた。」「お客さんにありがとうと言われて嬉しかった。」など達成感を得られるとともに、情報発信力の向上も見られた。

f 課題研究「食物」（3学年）

- ・子育て支援センター「ママプラザ」でのママ支援の食育活動（11月）

カフェの企画、地元食材を用いた幼児向けメニューの開発は行ったが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施できなかった。

- ・平福にあるお休み処「瓜生原」での高校生カフェにて、地元食材を用いたお弁当の提供による地産地消啓発活動（11月）

地元食材を使用した弁当の献立を考案し、「佐用高校生カフェ2021」としてイベントを行った。地元住民や古民家職員との交流を通じて生徒はコミュニケーション能力や企画運営力を習得するとともに、達成感を得ることができた。

【佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）】

a 総合的な探究の時間

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に健康寿命に関する知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

- ・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション（11月）
- ・佐用町の人口や高齢化率の現状を検証、佐用町自治会の協力によるモデル地区の現地調査を行うことにより、佐用町の抱える課題や要望など調査を行った。（9月）

b 生活産業基礎（1学年）

- ・生活産業とそれにまつわる職業についての知識の習得（5月）

地域の求める人材をベースに、生活産業分野での職業について学習した。来年度実施のインターンシップに向けて、生徒は意識付けと知識の習得ができた。

c 生活産業基礎（2学年）

- ・家政科2学年の生徒全員が、一社一人体制で5日間の就業体験実習（インターンシップ）を通して地域の職業人に学ぶ（8月）

地域の企業でのインターンシップを行った。企業探しをはじめ、打ち合わせのアポイ

ントメントなどを生徒自身が行うことにより「高校生訪問サービス」実施に向けた一助となった。

d 生活と福祉（2学年）

- ・播磨園やいちょう園を施設訪問しレクリエーション交流で体力づくり啓発活動（3月）
- ・美作市スポーツ医療看護専門学校にて福祉・介護の専門知識と技術の習得（7月、12月、3月）

e ヒューマンサービス（2学年）

- ・「高校生訪問サービス」にてアンケート調査とレクリエーション交流、食生活改善の提示（9月、11月、1月）

高齢者の生活実態を調査し、課題発見・解決力やコミュニケーション能力が向上した。

- ・佐用町社会福祉協議会との協働で「給食ボランティアサービス」の参画を通じて、独居高齢者の生活サポートを行い、ふるさと貢献意識と調理技術の向上が見られた。（5～12月）

f 課題研究「被服」（3学年）

- ・地元の高齢者施設や佐用保育所、子育て支援センターの利用者に向けて衣装製作を行い、健康寿命の延伸を心と身体の面からサポート（9月～12月）

高齢者施設や子育て支援センター利用者に衣装を提供し、11月に行われる地域文化祭でファッションショーの共演を行う予定であったが、中止となった。代替えとして、各施設で動画や静止画の撮影を行い、DVDの制作を行った。

g 課題研究「福祉」（3学年）

- ・きらめきケアセンター、朝陽ヶ丘荘、佐用保育所、子育て支援センターでの定期的な実習で、地域住民の生活サポートと実態調査（8月～10月）

保育・介護の班に分かれ、それぞれの施設で実習を行った。継続的な訪問を行うことにより、生徒は進路に向けての職業意識と専門技術の習得につながった。

【佐用の水害から学ぶ（安全・安心な町づくり）】

a 総合的な探究の時間（1学年）

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に防災に関する知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動（佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習）（5月～7月）地域に対する興味や関心を深める学びとなった。
- ・災害についての知識の習得（佐用町役場）（7月）
- ・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション（11月）

佐用町の水害被害を知らない生徒が多くいる中で、昨今の頻発する災害に備えるためにも、防災についての基礎知識をしっかりと学習できた。

b 生活産業基礎（1学年）

- ・商品開発におけるプロセスについての知識習得（11月～1月）

c フードデザイン（1学年）

- ・佐用町健康福祉課職員による災害講義と災害食（パック調理）の実習（11月）

d 課題研究「福祉」

- ・毎年本校生徒だけで行っている避難訓練を拡大し、地域や専門学校と協働で「佐用合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」を企画・実施した。（5月～12月）

学校内外の関係機関の方と生徒で合同会議を行い、企画運営を生徒自身で行った。佐用小学校の児童や近隣自治会の方にも参加していただくとともに、本校普通科、農業科学科生徒にも体験的な防災学習を実施した。ドローンによる演習など多岐にわたり大規

模な訓練になった。生徒には課題発見・解決力や企画運営力、コミュニケーション能力など多くの力が身につく機会となった。

- ・佐用小学校における防災教育と災害備蓄食学習（11月）

合同防災訓練に向けての案内と防災学習を兼ねて佐用小学校にて1年生児童を対象に生徒による防災学習と災害備蓄食（キャンディーレイ製作）学習を行った。

【学校家庭クラブ活動】

学校家庭クラブの基本方針である「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神を柱として、地域に貢献する目的で「研究活動」「ボランティア活動」「交流活動」を行った。

- ・「ふれあいの里上月」「龍北工房」にて地元食材を用いた焼菓子の定期販売を通して、地域の活性化と広報活動。（5月～12月）
- ・地域主催のイベントにて地元食材を用いた焼き菓子販売活動での地域交流（11月）
- ・「兵庫県総合文化祭」での開発商品や特産物使用の皆田和紙アクセサリ販売を通じた佐用町のPR活動（11月）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- ・2学年「ヒューマンサービス」にて社会福祉協議会との協働で「給食サービスボランティア」の実施及び2学年「フードデザイン」の授業でお弁当の献立作成
- ・2学年「課題研究（食物）」にて佐用町、企業との協働で特産品を使用した商品開発及び1学年「総合的な探究の時間」の授業内で「佐用学」の講義受講
- ・1学年「総合的な探究の時間」にて防災学習及び1学年「フードデザイン」の授業で「災害パッキング」講習会実施

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターンシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築に取り組んだ。

⑤全体の研究開発体制について

本事業を運営するため、校内組織に「地域協働部」を、校内委員会に「地域協働事業推進委員会」を新たに設置した。また、生徒の探究活動に対しては、全ての教職員が積極的に関わっている。

⑥カリキュラム開発等専門科及び地域協働学習支援員の学校内における位置付けについて

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
地域協働学習実施支援員	服部 憲靖	佐用町役場 職員	非常勤

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

カリキュラム開発等専門家が、コンソーシアム及び運営指導委員会で事業担当者からの報告を受けながら、成果の検証・評価を行い、計画・方法の改善策を助言した。それを地域協働推進委

員会において、学校長を中心に確認し、生徒へのアンケート等による事業評価等、不十分に思われる部分については、委員会としてどのように改善するかを協議し、改善する仕組みで事業を進めている。

また、月2～4回、学校長に、事業担当者が研究開発の進捗状況や課題等を報告し、指導助言を受けながら、適宜計画内容の確認と見直し・改善を図っている。

⑧成果の普及方法・実績について

a 「兵庫県総合文化発表会」にて研究成果の周知

1 1月に行われた「兵庫県総合文化発表会」において、特産品である皆田和紙を使用したキーホルダーやアクセサリの販売を行うとともに、研究成果を周知するために、本事業の紹介パネルによる展示も同時に行った。

b 瓜生原での「高校生カフェ」にて研究成果の周知

1 1月に行われた「高校生カフェ」において、地域の特産品を用いたオリジナル弁当の提供や焼き菓子の販売を行うとともに、本事業の紹介パネルによる展示も同時に行った。

c さよう文化情報センターにおける発表会の開催

2月に地元施設を使って本年度の研究成果の発表会を行うことで研究内容を地域に還元し、次年度の事業につなげる。

d 報告書の作成

本年度の調査、研究、発表の成果として報告書の発行を行い、近隣高等学校や家庭に関する学科設置校、連携機関等に配布し、事業成果の還元を図る。

1 1 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 生徒に身に付けさせたい力等について

三本柱で身に付けさせたい力等については、下記のとおりである。1年目の探究基礎力の向上に続いて、2年目は探究実践力を生徒に身に付けることができるように本事業を展開した。

【特産品による商品開発】

1年	【探究基礎力】 ・ふるさと意識 ・表現力 ・プレゼンテーション能力 ・知識力	総合的な探究の時間	○佐用町による特別授業 ○佐用町についての調べ学習・発表
		生活産業基礎 フードデザイン	○商品企画開発におけるプロセス学習 ○食に関する基礎知識と技術の習得 ○幼児向け食育活動 ○各種コンテストへの応募
2年	【探究実践力】 ・企画力 ・表現力 ・プレゼンテーション能力 ・コミュニケーション能力 ・ふるさと意識 ・調理技術	課題研究	○特産品を使った商品開発 ○災害備蓄食の開発 ○佐用町への情報発信
		ヒューマンサービス	○地産地消の献立開発
		フードデザイン	○開発商品でのレシピ考案 ○生徒による園児や小学生に向けた食育活動 ○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募

【健康寿命延伸に向けて】

1年	【探究基礎力】 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力	総合的な探究の時間	○佐用町の実態把握 ○モデル地区の実態調査計画
		生活産業基礎	○消費者ニーズ・商品企画に関する学習 ○職業についての調べ学習・発表

	・知識力		
2年	【探究実践力】 ・調査・分析力 ・課題発見・解決力 ・情報発信力 ・企画力	ヒューマンサービス	○「高校生訪問サービス」の実施 ○「給食サービスボランティア」の実施
		生活と福祉	○福祉の基礎学習 ○「認知症サポーター」の資格取得 ○高齢者と福祉に関する講習会 ○美作市スポーツ医療看護専門学校への校外学習
		生活産業基礎	○インターンシップの実施
		課題研究	○glaminka SAYO 職員による地域活性化の特別授業
		フードデザイン	○食改善レシピの考案

【災害に強い町づくり】

1年	【探究基礎力】 ・基礎的知識、技術 ・課題発見力 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力	総合的な探究の時間	○佐用学、防災学習
		生活産業基礎	○佐用町に求められる人材把握 ○防災関連商品開発プロセス学習
		フードデザイン	○災害学習、パッククッキング実習 →いずみ会、役場による講習会 →災害食調べ学習
2年	【探究実践力】 ・情報発信力 ・課題解決力 ・企画力 ・プレゼンテーション能力 ・コミュニケーション能力	フードデザイン	○保存食の開発 ○日本調理製菓専門学校での災害食についての研修
		ヒューマンサービス	○地域住民への聞き取り調査
		課題研究	○「佐用合同防災訓練」の企画と実施 ○小学校への出前授業

② 成果

a 具体的成果

- ・「佐用もち大豆コンテスト」で4名入賞
- ・「全国高等学校家庭科技術検定」の食物調理・被服製作（洋服）・被服製作（和服）における1級取得者ならびに三冠王受賞者の増加
- ・「色彩検定」「文書デザイン検定」受験者及び取得者の増加
- ・「文書デザインコンテスト」にて1, 480作品の中から審査員特別賞の受賞

b 身に付けさせたい力等について

各活動において生徒に対して行ったアンケート調査によると、生徒自身が身に付けることができた力としては、課題発見・解決力が88%、情報発信力が76%、調査・分析力が68%、コミュニケーション能力68%であった。次年度、この数値を高めることができるように本事業を充実させていきたい。

c 生徒意識の変容

生徒意識の調査を目的としてアンケート調査を実施した。家政科生徒の地域に対する意識の高さから本事業の成果として捉えることができる。

具体的には、「地元佐用町への理解」や「地域への貢献」等に対して、他学科（農業科学科・普通科）に比べて、高い結果が見られている。

③ 評価

研究成果の評価として、生徒によるポートフォリオの作成やパフォーマンス評価、学力調査や

アンケート調査などを通じて多面的な評価を行った。評価から本事業の取組が生徒に身に付けさせたい力を育ませるとともに、ふるさと意識等の生徒意識の変容にも効果があることが推察することができる。

また、三本柱の活動による生徒の感想には、前向きな内容が多く見られ、本事業への積極的な関わりや次回の活動へつながる振り返りが行われていることなどが読み取ることができる。

本事業の実施に際しては、職員会議等でのきめ細かい連絡・報告等を通して全教職員の理解と情報共有を行い、生徒の探究活動に対して全ての教職員が関わる体制を構築した。全教職員の協力のもと、インターンシップや高校生カフェ等の体験活動や探究活動等を実施することができたことは、その成果を出すことができた大きな要因である。

(2) 生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫

ア 仮説

生徒が課題を発見し、P D C Aサイクルを展開していくことにより、課題を解決できる資質・能力を身につけるためには、生徒がどれだけ課題に対して「わがこと」として主体的に取り組めるかが大きな鍵を握っている。そこで本研究では、生徒が行うP D C Aサイクルに対して、教員が次のような指導法を行うことにより、生徒が課題解決に向けて、積極的に取り組み、主体的な態度を育成できると仮説をたてた。

生徒の活動	P (計画)	→	D (実行)	→	C (評価)	→	A (改善)
教員の指導	「待つ」		「見守る」		「褒める」		「期待する」

①P (計画)・・・「待つ」

それぞれの取り組みについては、生徒達を中心に地域の方と一緒に、計画・実行・運営についての事前会議を何度も開催していく。その計画立案段階から、生徒達が主体的に取り組めるように、できるだけ教員からの指導助言は控え、自由な発想で取組を計画させていく雰囲気をつくる。教員はすでに自分の中に計画や到達点を決めてしまい、そのルールに生徒達を乗せ、上手に取り組ませようとする。そのことが生徒達の主体性を失い、やらされた感を抱かせることになっていく。生徒達は、自分たちが中心となって考え出したことに対しては、積極的に、責任を持って取り組む傾向がみられ、その中で主体性が育まれていく。そこで、教員には、生徒の自発的な考えを「待つ」姿勢が必要である。しかし、会議の中で、話し合いが進展していない場合もある。そのため、事前に会議に参加していただく地域の方に、取組の趣旨や目標を十分説明、理解していただき、地域の方々から方向性のヒントやアドバイスを会議の中で出していただくよう打ち合わせをする等の仕掛けを考える。

②D (実行)・・・「見守る」

実際に現場に出て生徒が取組を実践していく場において、教員は原則、危険なことが予想されない限りは、生徒達の取組にその場では指導助言はせず、「見守る」姿勢を通す。失敗をするかもしれないがそれは失敗として経験をさせる。活動に対して生徒達に責任感を持たせ、生徒自身が「自分がやらねば誰がやる」という主体性を持たせる。

③C (評価)・・・「褒める」

取組ごとに自己評価し、うまくいった点、うまくいかなかった点など整理し、結果を正しく把握させる。特に、うまくいかなかった点についてはその原因の分析を、生徒達に十分に話し合わせる。そして、生徒達の取組結果や姿勢に対して、良いところを探し、必ず「褒める」。褒められたことにより自己肯定感を抱き、自信となり、主体性の育成につながる。

④A (改善)・・・「期待する」

評価をもとに次回に向けての改善点を話し合わせる。改善策に行き詰まった時は、改善策を

考えるための方向性を与え、あくまでも自分たちで考えさせる。今回は生徒達がよりよい活動をしてくれることを信じて「期待する」。その期待感が生徒に伝わり、一層の主体性を引き出すことにつながる。

イ 実施効果とその評価

①高校生訪問サービス・給食サービスボランティアでの生徒の事前事後アンケート及び感想
事前アンケートでは低評価な部分でも、事後アンケートや感想では高評価に転じている生徒が多く、訪問サービスを通して生徒の自己肯定感の向上効果が見られる。

②「AI テキストマイニング」によりデータ分析

今年度の活動に対する生徒の感想を「AI テキストマイニング」によりデータ分析したところ、事前の心境から、事後の心境に大きな変化が見られ、多くの生徒が肯定的な意見や次年度への意気込みを示す言葉を多数記述していることがわかる。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

①新型コロナウイルスの影響による新しい生活様式の中での地域交流、貢献活動の在り方

「高校生訪問サービス」や「給食サービス」等は、生徒だけでなく、地域の方々にとっても、効果のある活動が実証された。しかしながら、コロナ禍のため、直接関わる活動が制限されるため、ICTを活用しながら、リモートによるコミュニケーションの機会を増やすなど、コロナ禍でも影響がない方法を確立していく。

②事業内容における「指導と評価の一体化」

今年度は各取組の中で生徒によるレポートやポートフォリオ、アンケート調査を多数実施し、生徒変容等をきめ細かく把握することに努めた。しかしながら、評価を指導に十分に活かせていないので、ルーブリックやパフォーマンス評価等も活用しながら、指導と評価が一体化できるように指導計画を立てる。

③グローバルな思考を身に付ける活動の展開

コロナ禍のため、これまで十分に組み合わせていなかった日本語学校の留学生との交流や隣接県との協働活動など、国際的な視野に立ちながら、グローバルな視点で物事を考えることができるような活動を積極的に行う。

④教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント

本年度は、本事業の成果を家政科の生徒だけでなく、1学年全体の地域活動や農業科学科による「ビジネスコンテスト」において実践した。次年度以降も教科や学年、学科を超えてさらに展開するとともに、実施内容の評価・改善をしながら、カリキュラム・マネジメントを行う。

【担当者】

担当課	高校教育課	T E L	078-341-7711
氏 名	神田 貴司	F A X	078-362-4288
職 名	主任指導主事	e-mail	Takashi_Kanda@pref.hyogo.lg.jp